

ところから自分の食うものをもってくるために海に出たんだ」「すると地主の力はすごく強かったんだね」「そうさ地主さんはお城のような館に住む殿様で、この地区の殆んど全部、知夫里島の6割はもっていたんだ。」と教えてくれた。

牧畑が四圍に分かれ、刈り跡放牧などをしていたのでヨーロッパの三圃式農業に類似していたのではないかという予備知識を入れて調査にかけた私は、以上のような話をきくにつけ、牧畑が村落共同体というようなユートピア的平等社会ではなく、南部や中国山地にみられた半隷属的な名子制度の名残りではないかと考えるようになった。この経験は昨年秩父の山村、栃木や四国の奥地山村、椿山で感じた以上に私に自分の目でみ、自分の頭で考えるという地理学者の原点であるフィールド・ワークの必要性和楽しさを教えてくれるものであった。

共 稼 ぎ 27 年

貝 山 久 子

昭和26年に結婚したので27年間共稼ぎを続けて来たことになる。結婚前から私は出来るだけ仕事を続けたい希望をもっていたが、夫は大正の人間らしく最初は私が家に居ることを望んでいた。しかし昭和25年に引揚後の無理がたたって父が亡くなり、長男である夫は母と弟妹を扶養せねばならなくなったので、一家の経済を支える為にも私は働かねばならなかった。昨今は共働きというのが一般的なようだが私はこの言葉が好きではない。経済的な理由で妻が仕事をもつことは、別に差すべきことでも何でも無いと思う。当時の姑の年令が現在の私の年令より低かったことを思うと感無量である。

こうして妻であり嫁でもある結婚生活がはじまった訳であるが、私は子供が生まれたら数年は育児に専念したい希望をもっていたので、仕事と経済状態のかね合いを考え、中々決心が付き兼ねていた。“子供の面倒はみてあげるから私の体力のある中に産みなさい”と云ってくれたのは外ならぬ姑であった。姑の真意は定かではないが、経済的な理由の外に、一つ屋根の下で暮すことから起きるトラブルを回避しようという考えが働いていたのではないだろうか。私も勿論そのことは十分すぎる程身にしみていたので、あえて自説を枉げて昭和31年に長女を、昭和34年に次女を出産した。しかし、当時文教育学部では既婚の助手は私1人であったから、産休の制度が確立していたわけではなく、ましてや産休要員などはのぞむべくもなく、肩身の狭い思いをしなければならなかった。家はおむつのとれるまで通いのお手伝いをたのんでしのいだ。その間妹と弟が結婚し、一応長男の嫁としての責任は果たしたのであったが、そのころには私が勤めをもつことは、既定の事実として受け止められるようになっていたように思う。

このようにしてふり返ってみれば長い道程を今日まで来たわけであるが、何と云っても与つて力あるのは、家族全員が健康なめぐまれていたことと、姑の協力であったと云えよう。しかしその間完全に平穏無事だったわけではなく、子供の病気やケガ、夫と私の入院、姑の再度の入院と死などのアクシデントが我家をおそった。また私はいつも家に居て針仕事をしたりお菓子を焼いたりする母親のイメ

ージにあこがれ、ひもじさをこらえる子供のような気分におそわれ続けた。また“最近女性の職場進出がふえているが、身近な例からみて共かせぎ夫婦の子どもは有名大学に行っているケースが少ないようです。忙しくて子供にあまり手がまわらないムタ……”と影山裕子氏が云われているように私も娘をいわゆる有名大学に入れることはできなかった。しかし勿論後悔しているわけではない。朝6時に起きて夜11時半ころ就床するまでの私の日課は、姑が亡くなってから一層めまぐるしく、おそいた食が終るとそのままこたつの中でうたた寝をすることもある。元旦の新聞の“高いびき派手に横たう妻の顔”(周作)の句はまことに身にしみてほろ苦い笑いをさそったが、“愚かさや胸にしみ入る妻の愚痴”というようにはなるまいと自戒している。長女が生まれたころは有職女性中既婚女性のしめる割合は30%であったが、51年度には64%に伸びているという。心強い限りである。

ユングフラウ瞥見記

赤木 健

本稿は1975年7月～9月にロンドンに滞在する機会があり、その際スイス、イタリアの旅行班に加わり、スイス巡回の御見聞した日記の一部を記したものである。

第1日、旅行班はバスに乗り、スイス南端の別荘地ルガノを出発し、北々西にベンチナ川を溯りアイロロ町に至り、それより北西に急坂を登り、片麻岩系岩石の発達するサンゴタルド峠(2,108m)を越えて峠下で休憩した。これより道を北に降り、ホスペンタール部落を過ぎアンダーマツで昼食をとり、北進してワッセン町で銀行に立寄りスイス・フランの両替をした。これより道を西に進み、片麻岩より成るスーステン峠(2,224m)越の道となる。峠の南にはスーステン・ホルン(3,504m)の高峰が聳え、これより発する氷河が横たわり眺望は壮観である。峠より西に羊腸とした道路を西に約1,000m余下り、ガードメン部落を通過、マイリングルに到着し約20分休憩する。これより西に進みブリエンツ部落を通り、湖の北岸を西にインターラーケンに到り、これより南に谷を登り、グリンデルワルトに到着ホテル・サンスターに投宿した。当地は標高1,034mで、アイガー及びシュレック・ホルン等の高峰を仰ぎ、周辺に広々とした牧草地帯を控えた良い環境に囲まれた登山口で、ホテル、レストラン、土産物店、スポーツ店、観光協会等が立並ぶ山岳人の町である。

第2日、朝ホテルを出て、ウエンゲル・アルプ鉄道経営の電車で、アイガー峰の東麓に沿って広がる牧場の中を西方に進み、アルビグレン駅を過ぎる附近から、目前にアイガーの北壁が迫ってくる。そして電車はその下をしばらく登り、やがて広々とした緑のクライネ・シャイデック部落に到着し下車する。当地はグリンデルワルトより約1,027m高位を占め、ホテル、レストラン、土産物店が並び、アルプス観光客の集合地である。

これよりユングフラウ鉄道経営のユングフラウ・ヨッホ行の電車に乗換え、アイガー峰北麓の草原を南方に進み、間もなくアイガー及びメンヒ両峰の山体内に隧道により入り、視界は閉ざされる。附近の岩層は黒色の堅岩より成り白色岩脈の貫入体が観察される。

そして電車は始発駅から終点迄の所要時間は、40分でその高度差1,493mを登り、終着駅ユング